

道民カレッジ主催講座令和2年度第1回地域活動インターネット講座

まちの情報を声で伝える朗読ボランティア
～声と心でまちづくり～

説 明 資 料



道民カレッジ事務局

<道民カレッジ事務局早坂>

今日は新十津川町に来ています。

こちらで朗読ボランティアの活動をしている村中一美さんの活動をご紹介します。先生どうぞよろしくお願ひします。

<北翔大学非常勤講師谷川松芳氏>

講師紹介

社会教育主事として31年間地域で活躍後、北翔大学で12年間生涯学習講座を担当。北海道生涯学習審議会の会長などを歴任。道民カレッジの立ち上げにも関わり、現在まで全道各地で生涯学習に関する講演で講師を務めています。

よろしくお願ひします。

<早坂>

では行きましょう。

【おじさん図鑑】

正直の頭に神宿る

知り合いの若夫婦がスーパーの駐車場に停めた

車に乗ろうとドアを少し開けた時

突風が吹いた・・・

<ナレーション>

毎週水曜日ゆめりあ2階の視聴覚障害者ライブラリーで収録・編集を行っています。

会の名前はゆめクラブ。「北海道新聞」「プレス空知」などから新十津川町関連記事を中心に選び出し、会員が読み上げテープに録音。2週間分の情報を60分テープ1本に収め、目の不自由な方に送付しています。

<谷川先生>

村中さんが今活動に取り組んでいる具体的な内容はどのようなことになりますか。

<村中さん>

今日私がおじさん図鑑を録音しましたね。その他にプレス空知(新聞)からそれぞれ分担して、記事内容を読んでそれを1本の録音テープに入れて、目の不自由な方に。

<平石事務局長(社会福祉協議会)>

見て頂いてわかる通り、建物内に朗読ボランティア専用の部屋があります。この建物ができたのが2000年（H12年）なので20年前ということになります。この建物ができると同時にボランティア団体が結成されました。

朗読ボランティアの対象は主に目の不自由な方。目の不自由な方は入ってくる情報も限られるということもありますので、目の不自由な方にとっては情報を得る貴重なツールのひとつ。

このサービスの受け手は10人くらいですが、こちらで把握している、いわゆる全盲の方は1人です。

<谷川先生>

活動のきっかけは何だったんでしょうか。

<村中さん>

ここに平成5年定年退職して来まして、そういう状況を聞き何かひとつありませんかということで、社会福祉協議会に。

<谷川先生>

利用しているお年寄りの声はどうですか？

<村中さん>

私は聞いていません。私はただおじさん図鑑を声に出して入れているだけ。

利用者にお話しを聞いてきました

<インタビュアー>

20年以上前はまちの情報はあったのか？

<利用者>

全然無かったんです。

<インタビュアー>

20年前から（テープが）来るようになって、まちの様子を耳で知ることができるようになったということですね。

<利用者>

ほんと助かりますよ。テープが来るのは。

<谷川先生>

先ほど収録の様子を見たら、機械操作する方もマイクの前で（朗読する方も）すごく生き生きとしているんですけど。

<村中さん>

ちょうど6人が和していける人数ではないでしょうか。

<谷川先生>

本当にみんな良い顔してやっていますよね。黙々と・・・

<村中さん>

たまたま今日は天気が良かったから。

<谷川先生>

コロナのせいで久しぶりに会えるっていうのもきっとあったんでしょうね。

それで、活動の成果としてご自身で色々な活動をされているんですけども、今このクラブの活動をして喜びや成果はありますか。

<村中さん>

今の歳になりますと、出番が限られてきます。身体も思考も弱くなってきますから、この部分については半分の力、この部分については全力でというさじ加減を決めてやっているから継続できる。

ですから、引き際も大事なんです。

<谷川先生>

年をとっても引き際があって次に行くということですね。

<村中さん>

そうそうそう。

<谷川先生>

村中さん、お金じゃないですよ。心とその声です。それが社会福祉協議会を支え利用者に伝わっているっていう感じがするんです。

<平石事務局長（社会福祉協議会）>

村中さんはボランティア活動長いんですが、社会福祉協議会で実施している給食ボランティアの配食（配達をしてくれるボランティア）、一人暮らしの高齢者などに安否確認を行うハートコール、それと隣にあります障害者の通所施設の送迎のボランティアもしていただきっていました。長年そういった活動に携わってもらっていました。

新十津川町にとっては貴重な人材です。

<谷川先生>

クラブのあえて言うならば今後の課題や夢についてはどうお思いでしょうか。

<村中さん>

もっと多くの方達に参加・加入していただければよろしいかなど。
他人のために役立つとすれば力を惜しまず提供したい。そういう気持ちなんです。

<谷川先生>

好きでやっていると思われているかもしれない。

<村中さん>

「暇だから」とかね。

<谷川先生>

でも好きでなければまたできないことですよね、この活動は。
誰かのために役立っているということになれば、これまた違いますよね。
自分は好きなんだけど、好きでやってきたことを喜んでくれる方がいて、地域社会・新十津川町が豊かになっていく。

ノーマライゼーション

障害をもつ者ともたない者とが平等に生活する社会を実現させる考え方。

ボランティアの専門用語に「ノーマライゼーション」という言葉があって、一定の地域の中には子供からお年寄りまで健常者も障害者もいるけども、皆で共に十津川から来た先人の後を新十津川で共に暮らそうというのを、まさにこのクラブで実践されているのかなという感じがするんです。

新十津川の人と人のつながり（子供もお年寄りも独居老人の方も）、いろいろなことを経験してきて今も学んでおられる（生涯学習をしている）。それらの学んだことを、地域を見た時に、環境の問題とか登下校の子供たちのことや、あるいは障害を抱えて生活している方達の地域課題を発見しながら、実際に行動に（移している）今自分にできることからやっている。（地域の課題は）自分の問題でもあるけれど、地域の課題として実践されているとても素晴らしい活動です。

生まれてから死ぬまで学び続けて、まだ村中さんはずっと学び続けるその生涯学習を社会福祉・ボランティアとして一人の人間として当たり前のように行動して何かに発展させている。

<平石事務局長（社会福祉協議会）>

（社会教育との連携について）

特に意識したことはないですけど、町の教育委員会とも良好な関係・常に連携し情報交換などはさせてもらうようにしています。

（成果としては）ボランティアは一方的になりがちな部分もあるんですけども、社会福祉協議会としては年に一回ですけども、ボランティアサービスを受けている方と提供している方の交流の場ということで昼食会を開催して、双方が交わるような取組をして、活動が独りよがりにならないような配慮をしているつもりです。

課題としてはボランティアの高齢化が進んでいまして、新たな人材の発掘育成が今後に向けての課題なのかなと考えています。

これからについては、地域共生社会の実現と言われているので、今まではボランティアを提供する側、受ける側のカテゴリーが分かれていましたけれども、これからは垣根を無くして誰もが地域で役割をもって生活していけるような地域になっていくのが理想かなと。

それをお手伝いしていくのが社会福祉協議会でありもしかすると生涯学習の部分でもあるのかなと考えています。

<谷川先生>

もう話を聞いているだけで、こういう方が増えると（先ほど打ち合わせの前に独居老人のお話をしましたけれども）人と人のこの関係が一番大事で、三軒両隣の他者との関係が地域活動の原点かなと、それを実際にやられている。

ゆめクラブの活動も素晴らしいけれども、地域の一員として活動している村中さんの生き方を是非多くの方（これから高齢者を迎える方、今高齢者の方）にこういうことを学んで他人の行い・行動・発信を学びながら自分の生き方にもう一回フィードバックしてそれをまた地域に還元していくと年齢関係なく長生きできるということが見えてきました。ありがとうございます。

この講座の感想をレポートにまとめ道民カレッジ事務局に提出すると地域活動必修コース1単位を認定します。

提出は郵送またはメールで受け付けています。たくさんのレポートお待ちしております。

060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目 北海道立道民活動センター（かでる2・7）9階
college@manabi.pref.hokkaido.jp